

現代アイルランド劇作家研究(5) —— ガラリー・ミッチェル ——

河野賢司

はじめに

北アイルランドのプロテスタント系住民は、一般に「ロイヤリスト」あるいは「ユニオニスト」という政治的用語で置き換えられて呼ばれることが多い。ある宗派に属する集団が、総体として、特定の政治上の信念や立場を共有することは珍しくはなく、筆者はこれまで「プロテスタント」≒「ロイヤリスト」≒「ユニオニスト」、つまり視点や微妙なニュアンスの差こそあれ、宗教と政治が密接に絡み合う北アイルランド社会では、この3者はほぼ同じ人々を意味するものと認識してきた。これに対して、〈アイルランド紛争は宗教戦争ではない〉という、意外な響きのする訴えが、実際に北アイルランドでテロ活動に参加したことがある当事者から寄せられている¹⁾。もちろん、「北アイルランド紛争を宗教戦争としてのみとらえるのは妥当ではないし、どちらかといえば歴史的要因がからんだ階級闘争の側面が濃いと云える」²⁾と筆者は考えてきたが、この指摘——全面的には肯定しがたいけれども——に、分類用のレッテル貼りや大雑把な図式整理の落とし穴を突かれる思いがしたことは事実である。本稿で取り上げる劇作家は、「プロテスタント」で「ロイヤリスト」あるいは「ユニオニスト」の声を代弁する作家である、と従来通りの概念の枠組みで紹介せざるを得ないのだが、こうした枠組みが有効に機能しているかどうかは、判断を委ねたい。

I 著者略歴

ギャラリー・ミッチェル (Gary Mitchell, 1965-) は北ベルファーストのラスクール (Rathcoole) 生れ。学歴や職歴は、残念ながら未詳。1990年に最初のラジオ・ドラマを書き、BBCラジオ4の若手劇作家祭賞を受賞、1995年に『独立した声』(*Independent Voice*) でシュワート・パーカー賞を、プロテスタントとして、また北アイルランド出身者として初めて受賞する。1998年『我々自身の小さな世界で』(*In a Little World of Our Own*) が『アイリッシュ・タイムズ』最優秀新作賞を受け、ベルファーストのリリック劇場へのアビー劇場の初巡回公演として上演された。この年、ベルファースト

スト演劇賞を同作および『沈没』(Sinking)で受賞し、ロンドンのロイヤル・ナショナル劇場の座付作家に任命される(1998-9年)。『信頼』(Trust)はピアソン最優秀新作賞を受け、2000年4月のロイヤル・コート劇場での『変革の力』(The Force of Change)はジョージ・デヴァイン賞と『イブニング・スタンダード』チャールズ・ウイントウア嘱望作家賞の両賞を受賞。『変革の力』はBBC2でのテレビ・ドラマ化(60分番組6回完結)が進行中。現在、アビー劇場上演予定の『悔恨』(Remorse)を執筆中という。昨年11月に『忠実な女たち』(Loyal Women)が刊行されたはずであるが、未着である。

II 作品梗概と論評

①『我々自身の小さな世界で』(In a Little World of Our Own) 4幕

初演は1997年2月12日(プレビューは2月6日より)、ダブリンのピーコック劇場、8月13日に同劇場で再演後、南北アイルランドを巡回。ロンドン初演は1998年3月3日(～7日)、ドンマー・ウェアハウス(Donmar Warehouse)にて。

第1幕。夕方の早い時刻の居間。レイ(Ray)と相棒ウォルター(Walter)の会話で始まる。面倒をみてやったある婦人(Mrs. Wilson)からお礼として現金とチョコ菓子が送られてきたのをウォルターがレイに渡す。レイは、空巢常習犯の不良少年たちをハンマーで痛めつけ全治2か月の傷を負わせたりもするが、長い目で見れば刑務所に入出入りする惨めな一生を送ることを阻止し、彼らのためになっている、と主張する。しかし、現実には非暴力・平和主義を唱えるモンロー(Monroe)のような人物が人々の尊敬を集めており、富裕階級にその傾向が強い。いわば街の用心棒的な役割を果たして謝金を得ているレイだが、もともとは金目当てで始めたのではなく、正義感からのことであって、UDA(アルスター防衛協会)は過去も現在も政治団体ではない、かつてはカトリック野郎はこのラスクール地区を歩くことをびびっていたものだが、いまではいたるところにのさばっている、それもこれもみなモンローのせいで、弟リチャードが好意を寄せている、モンローの娘スーザン(Susan [Susie])はカトリック野郎とデートしている、と憤慨する。「カトリック野郎とデートさせるくらいなら知恵遅れとデートさせるほうがまだましだ」と、軽度の発達障害をもつリチャードを暗に匂わせる差別発言をモンローが酒場でしたことを噂で聞いたレイは、その場に居合わせたウォルターに事実関係を詰問し、障害は天賦の才能であり、感受性や情愛豊かなリチャードは神からの贈物であるとお袋から聞かされたし、一昔前なら障害があってもなんにも困らなかった、と諭す。モンローが怖くて黙認した、と弁明するウォルターに、弟の特殊学級行きを囁いた上級生をぶん殴って抵抗した自分の経験を引き合いに出し、殴ってやるぞ、とモンローに言ってやれ、と檄をとばすレイ。そこへ二階から当のリチャードが食器類を持って降りてくる。(まずいから食べなかったのは母親だと彼は言うが、二人は信じないし、実際嘘のようである。ウォルターは酒場に向かう。)食洗器にかけたあと、リチャードは夢中になっているトランプ遊びにレイを誘い、彼は応じる。レイはトランプのルールや秘訣——自分は無表情で、たえず相手に話しかけて集中を乱す——など、弟を巧みにおだてながら指

南する。ゴードン (Gordon) が恋人デボラ (Deborah) と帰宅、彼女は二階へ直行する。(寝たきりの母親のよき話し相手であり、信心深い一家 [God Squaders, 11] に育ち、靴屋に勤務する彼女はトランプ遊びを嫌っている。) ゴードンは大事な相談事があると切り出す、二人は勝負が決着するまで取り合わない。デボラと結婚予定のゴードンは、この家を出て一緒に暮らす新居物件を決めてきたことを伝え、母やリチャードの処遇などの懸案を相談したが、レイは無反応。ゴードンが二階に上がった際に、リチャードは今夜のパーティにレイに車で送迎してもらう約束をしていた件を確認する。7時に会場となる家に送り届け、10時45分に迎える(教会の礼拝から11時に帰宅するゴードンに気づかれぬように)段取りをレイはつけ、例のカトリック野郎がスーザンにつきまとうことを心配するリチャードに、スーザンの意思次第だとしながらも、なにかもめごとが起きたらすぐに自宅に戻り知らせろ、と指示する。二階からゴードンとデボラが降りてくる。二人はリチャードに新居見学を熱心に勧める。(障害をもつリチャードを大きめの新居に引き取って、同居を考えている。)今夜はパーティで駄目だ、とリチャードがうっかり漏らしてしまい、どんなパーティか問いただすゴードンにリチャードとレイは答えない。母親の介護だけでも手一杯のレイのもとにいるよりも新居へ明日にでも引越すことをゴードンは強硬に主張し、嫌になったら戻ってもいいからとにかく一度来てほしい、とデボラも穏やかな口調で説得するが、リチャードはあくまで拒絶し、レイも弟の自由意思に任せる、とやはり譲らない。執拗な説得工作に痺れを切らしたリチャードはトランプ札をテーブルに投げ出して部屋からとび出し、レイも弟の世話は俺がみる、と言い残して退室。リチャードの帰趨は神の思し召しであり、祈るほかはない、と語るデボラに、自分には神の声が聞こえない、もし神が無理難題(たとえば息子殺しをアブラハムに命じたような)を下したら自分は従えない、とゴードン。自分ならリチャードはなるべく外出させないし、交際相手のスーザンが短い膝丈のスカートを男たちに見せびらかすような、まだ15歳の少女であることも心配だと彼は語るが、引きこもるよりもパーティに出かけたり、恋をする方が健全だし、リチャードやレイの人柄はこの狭い地域社会には知れ渡っているから心配は無用だ、とデボラは諭す。しかしゴードンは先行きを悲観して、新居の件自体を白紙に戻そう、と思わず弱音を吐く。これにデボラは激怒。新婚生活を夫の家族3人との同居で始めるのは絶対に願い下げだ、あなたが実家にとどまらなくても他の人は好き勝手に行動するし、私たちの結婚生活のこれまでの計画はどうなるのよ、と優柔不断なゴードンに業を煮やして立ち去る。

第2幕。同日深夜の居間。ゴードンとデボラ(二人はおそらく礼拝帰りに家に立ち寄ったと思われる)のもとへウォルターが来訪。彼の報告によると、パーティに友人と出かけたスーザンが帰宅せず行方不明で、警察に通報しても無断外泊だろうと相手にされなかったという。リチャードがスーザンと駆け落ちした可能性を疑うウォルターは、弟の所在を尋ねるが、寝ているとゴードンは嘘をつく。そこへレイがリチャードを連れて帰宅。矢継早の問いには答えず、まずレイは弟に就寝を命じる。レイの説明によれば、スーザンはマイケル (Michael) というカトリックの若者と先に帰った、父親のモンローはこの交際に激怒するだろうが、非暴力の柔な姿勢が招いた自業自得だ、という。リチャードが一人では怖くて寝れない、と降りてくる。リチャードが余計なことを口にしないうちに、他の3人を家から追い払おうとゴードンは懸命になる。しかしリチャードは兄の制止にもかかわらず、以下のように口を滑らせる——会場の外でマイケルが彼女にいちやついていたが、自分の姿を見て殴りかかってきた、するとレイがかけつけ、彼女は倒れた、と。レイはゴードンに命じてリチャードを寝室に下がる。レイは、迎えの待ち合わせ時刻を過ぎても弟が現れないので、スーザンとマイケルの向かった先を聞いて行ってみると案の定、弟が二人の後を追っていた、マイケルが弟に手荒な真似をしていたのでカッとなって何発か殴ってやった、スーザンが喧嘩をやめさせようと取り乱したので、弟を連れて家路についた、しかしスーザンの身を案じる弟に、様子を見てきてほしいと頼まれた

ので、現場に戻ってみるとスーザンが撲殺されて横たわっていた、おそらく俺に殴られた腹癒せに、マイケルが彼女を卑怯にも襲ったのだろう、やがて弟も現場にやってきたので、一緒にその場を逃げた、のだという。はやく救急車や警察へ通報すべきだ、とみなは驚くが、少女暴行殺人事件となれば性的異常者の仕業、そして発達障害のリチャードに嫌疑がかかることは必定であり、いくら真相を話しても信じては貰えないから、そのまま成り行きにまかせるしかない、とレイは主張する。せめて匿名で救急通報すべきだと言うウォルターに、救急通報なら途中の公衆電話から済ませた、とレイは弁明するが、真偽は明らかでない。いずれにしても、リチャードに不利益を招かぬように、ウォルターは訪問したら一家が就寝中だったと嘘をつくことなど、今夜の出来事は他言無用、いっさい知らぬ存ぜぬを通すことをウォルターとデボラに確約させる。

第3幕。翌朝。病気を口実に欠勤したゴードンに、近頃は就職難だから職は大事にしろよ、とレイ。ウォルターがさっそく事件の経過報告に来訪している。病院に收容されたスーザンは断続的に昏睡状態に陥る危篤状態で、付き添いのモンローは激怒していたこと、スーザンがうわごとまじりに口にした言葉に、リチャードとレイの名前があったと告げる。レイは、暴行犯はカトリック野郎のマイケルだが、衝撃のあまり彼女が混乱しているか、俺を陥れようとするためにモンローがわざと曲解したかであり、直接自分がモンローに説明する、と答え、いまとなっては真相を話してもかまわない、48時間以内に真犯人のマイケルをつかまえる好結果³⁾をあげ、本人に自白させてみせる、と声明する。なぜ事件のときに取り押さえなかったのか、というウォルターの問いに、殴ったあとで現場に戻った際には、奴は丘の麓の遠いところへ逃げ去っていたからだ、とレイは答える。ウォルターはなおも事実関係を釈明するときに必要だからと様々な質問を投げかける。——もし、スーザンの意識が回復して、レイの説明と異なることを言い出したらどうすればよいか、最初に殴った後、マイケルをそのままスーザンのもとに残したのはなぜか、故意にせよ過失にせよ、リチャードがスーザンを襲ったのではないか、などと。そしてついには、リチャードによるスーザン強姦現場を目撃したレイが、口封じにスーザンを撲殺したのではないかと、ウォルターは邪推して問い詰める。レイは否定し、ビデオ・カメラなどの撮影機材と場所（空きアパート）を手配するようにウォルターに依頼し、リチャードを連れてきて事件当夜の行動を「証言」させ、出ていく。リチャードはトランプ遊びを始め、腕前を自慢するが、ウォルターは、レイに危害を加えられたとスーザンが話しているが本当か、違うならスーザンは嘘つきのあばずれか、と挑発する。するとリチャードは、逡巡の果てに、次のような告白をする——（マイケルがリチャードを愚弄するのを聞いて）レイが激怒したくだけりまではレイの話と同じだが、マイケルはレイの剣幕におじけづいて一目散に逃げ出し[つまり、レイに殴られてもいない]、悪酔いのスーザンと罵り合いになったレイはスーザンの顔を平手打ちし、弟のために「かましてやる／やっつけてやる」(sort her out)と、性交に及んだのだという…。この衝撃的事実の暴露に、ウォルターとゴードンはリチャードを二階へ上がらせ、対応策を相談する。もちろんリチャードの告白は秘密扱いにし、リチャードの身柄を警察に預けた方がよい、なぜなら、障害者が犯人だろうという先入観にみちた憶測で警察は動くに違いないし、レイが真犯人だと主張しても本人は自首しないでマイケルを半殺しの目にあわせて濡れ衣をさせるだろうし、敵が多いので罠にかけられたとか、あるいは障害を持つ弟をかばって身代わりになろうとしているなどと、レイを擁護するのは簡単だし、仮にレイが逮捕されても、リチャードやゴードン、デボラや母親まで世間の冷たい仕打ちを受けることになる、とウォルターは説明する。無実のリチャードを警察に売りたくない、と消極的なゴードンに、ウォルターはそれなら選択肢はただひとつ、リチャードの膝を撃ち、負傷させることだ、傷そのものよりも度胸を要する自傷行為こそ、モンローのような仁侠肌の男が敬意を払うけじめの行為だと勧め、ゴードンに銃を手渡す。

第4幕。後刻、同じ居間。ゴードンはデボラを招いている。警察に出頭してレイを逮捕させようとするゴードンに、デボラはやはり神に祈るしかない、と答えつつも、レイが監獄に入れば、リチャードは障害者施設、母親は老人ホーム送りになってしまう、悪事を犯す暇などないほど、レイにリチャードや母親の世話をやかせようという神の思し召しかもしれない、と押しとどめる。ゴードンはウォルターから預かった銃をデボラに見せ、意志に反しても神のお告げ通りに行動して、リチャードを撃つことが被害を最小限に食い止める手段だと訴える。そこへ裏口からレイが入ってくる。彼は腹部を撃たれており、床に倒れ込む。危篤だったスーザンが息を引取り、いまわの際にレイたちの名前をあげたため、さらにウォルターに（おそらく密告されて）はめられたために報復を受けたらしい。二階から降りてきたリチャードをデボラとともに二階に去らせようとするが、リチャードは拒絶。レイはそのリチャードに、スーザンが今朝死んだ、と告げ、浮気者スーザンを改心させるために神が彼女を天国に連れていったこと、彼女の面倒をみてやるために自分もこれから天国に行くが、お前は母親やゴードンの世話を残って残っていてくれ、と語る。戸口にウォルターが現れ、レイを外へ連れ出そうと望むが、リチャードと仲直りができたし、神にも許しを請うた、監獄も嫌だし植物人間として車椅子生活も御免だ、俺はスーザンを強姦した、これ以上罪の上塗りをさせぬために撃ち殺してくれ、とレイはゴードンに懇願する。警察に電話しようとするデボラをウォルターが払いのけ、彼と取っ組み合いになったゴードンは銃を落とす。拾い上げたリチャードにレイは、俺を撃て、と命じ、叱咤の平手打ちを食ったリチャードはレイを撃ち、抱きついて詫げる。レイの「お前は男だぜ」の台詞で、幕。

標題の「われわれ自身の小さな世界で」という表現は、テキストに台詞として登場しないものの、要介護の母親と3人兄弟からなるこの家族を指している。レイプ事件の謎をめぐる推理劇の側面もあるが、この作品の強い兄弟愛には圧倒される。決して重度ではないが発達障害を抱える弟リチャードを溺愛する兄レイは、弟の純朴な性質とは不似合いなスーザンを、激情に駆られて強姦致死させてしまう。弟を侮辱し、また自分と主義主張を異にするスーザンの父親への恨みもこの暴行事件の原因の一つだったかもしれない。俺がかならず弟を守りぬく、という信念が、レイを極端な行動に走らせたが、そのために弟の身に危険が迫ると、彼はきっぱりと責任をとって死を選択する。裏社会では仁侠の美学として通用するだろうこの結末も、しかしながら結果的には、弟を尊属殺人の犯罪者にしてしまい、癒し難い心の傷として兄を殺した記憶がリチャードを苛み続けることは容易に想像できる。混迷する北アイルランド社会の暗闇を実感させる秀作である。

②『織機を引き裂いて』(Tearing the Loom) 2幕

初演は1998年3月17日、ベルファーストのリリック劇場。場面は1798年、アーマー州のタンドラギー (Tandragee) 近郊に設定されている。

序幕。サミュエル・ハミル (Samuel Hamill) とウィリアム (William Hamill) の父子が、あるカトリック女性を処刑する場面。女性は頭巾をかぶせられ、両手を縛られて転がされている。棒に縄をつけた絞首刑具 (garrotte) を使って、サミュエルは息子に自力で彼女を絞め殺させる。

第1幕。機織り職人のロバート・ムア (Robert Moore) が息子デイヴィッド (David Moore) に技術を教えようとするが、息子は身が入らない様子。彼の祖母アン (Anne) は、ちょうどロバートが結婚前にそうだったように、好きな女の子がいるせいではないか、と探りを入れるが、デイヴィッドは否定する。黎明団⁴⁾ (Peep O[*sic*] Day Boys, 70) 時代の武勇伝や自作の詩の朗読でもしてやれば孫も喜ぶだろうに、とアンが水を向けてもロバートは無視。機織り技術の修得が大切なのは、たとえば強盗が押し入り、悪意から「織機を引き裂い」(tear your loom) た場合、修復作業に通常2週間近くかかり、食い扶持もなく子どもは飢え、病が襲うことになるが、自分なら1週間で直すことができ、息子にはぜひとも会得して貰いたいからだ、と諭す。繰り返し聞かされた機織り手順や、小麦粉液を糸に塗って乾かし、獣脂 (tallow) を刷り込むこつ (trick) などをデイヴィッドは暗唱するが、その効能——仕上げが滑らかで漂白の際に仕上げ糊が溶ける——もよく理解しないと一人前の職人にはなれない、との叱責に、職人にはなりたくない、と口走る。亜麻 (flax) 栽培や乳搾りを厭わず、上質の亜麻布^{リネン}製作に専念させようと掌の荒れる畑仕事も息子にはさせず、一人前の立派な男にしようと毎朝願うのに、こんな息子などいらなかった、と毎夕後悔する始末だ、と愚痴をこぼすロバート。デイヴィッドは、子は親を選べない、と口答えして、お茶の休憩をとり、息抜きに戸外へ出る。亡き妻マーガレット (Margaret) が生きていれば、子どもをうまくしつけられたのに、とロバート。祖母はロバートが、死んだ彼の父親と子育ての姿勢や信条が生き写しだが、息子にはもっと自由を与えた、と諭す。アメリカやフランスの動乱 [アメリカ独立戦争 (1775-83)、フランス革命 (1789)] の影響で当地も世情が不安定になっており、戦争をきちんと理解させるためにもデイヴィッドを闘鶏 (cock fight) 見物にいずれ連れて行こう、とロバート。デイヴィッドが戻り、寝室へ。続いて、娘のルース (Ruth) が見知らぬ若者ハリー (Harry) と帰宅。ロバートはこの若者に冷淡な態度を示し、娘と一緒にいたはずのハミル家のウィリアム (ロバートは娘の許嫁と見なしている) の所在をルースに詰問する。ハリーの説明によれば、国家の将来を議論する重要な会合が酒場 (tavern) で開かれ、部外者の出入りを監視する役割だったが、そこで騒動が起きたため、自宅まで安全に彼女を送り届けたのだという。しかし実際には、彼はルースに求婚したいと切り出し、彼女もそれを承諾すると明言するので、ロバートは激昂し、ハリーを追い出す。事情を尋ねるアンに、ルースは、政府を樹立し、自由回復をめざす人々——〈統一アイルランド人連盟〉⁵⁾ (The United Irishmen) ——が出席する重要な会合が酒場で開かれたと語るが、ロバートやデイヴィッドは国内問題よりも家族が大事だ、と一蹴する。ルースはポケットから取り出した書類をロバートに手渡して、寝室に下がる。書類に目を通したロバートは、それが〈オレンジ協会〉 (The Orange Institution) の結成宣言書であり、デイヴィッドがこれに宣誓を終えたと聞いて、愕然となる。なぜなら、有事の際には、まっさきに徴兵されて戦死の危険を冒すことを意味するからである。〈オレンジ協会〉について教えてくれたのはハミル家のウィリアムで、〈統一アイルランド人連盟〉によるアイルランド破壊を阻止し、祖国を防衛せねばならない、我々は英国国王のために戦う、とデイヴィッドは訴えるが、ロバートは自分の家だけを守れば十分だ、よそ者の国王は自らこの戦いには加わらない、と反論する。協会の夜警団 (night watch) に志願したから、ウィリアムとともに出かける予定であること、戒厳令施行で5人以上の集会は禁止されているから、鼓手隊や幟^{のぼり}で勇壮な伝統行事の織工行進 (Weaver's great march) も今年はお預けで、許可されているのは、英国国王のために戦う、真のプロテスタントの〈統一アイルランド協会〉 (the United Irish Society) だけだ、ウェックスフォード (Wexford) での極

悪非道のプロテスタント大虐殺の史実——伝聞や作り話だとアンは反論するが——を知りながら、勇敢に戦えないプロテスタントはカトリック以下の人間だ、とデイヴィッドはまくしたてる。そこへウィリアムが登場。すでに〈統一アイルランド人連盟〉の反乱が勃発してプロテスタントの民家を襲撃中で、やがてフランス軍が上陸の恐れだと報告する。〈統一アイルランド人連盟〉に所属するプロテスタントは、長老派の反逆者どもでプロテスタントではない、いまからでも遅くない、親子そろって参戦しようとロバートに呼びかける。すべての宗派の代表者たらんとするのが〈統一アイルランド人連盟〉の本意、とアンは反論するが、無視される。ロバートはウィリアムにルースとの結婚の意思を確認すると、ムーア家の人々や家業には敬意を払うが、ルースのせいで自分や家族が恥辱を味わった以上、縁談話は打ち切らざるをえない、と断言して飛び出す。デイヴィッドも銃後の守りをロバートに依頼して、後を追う。〈統一アイルランド人連盟〉の勢力が弱い地域だから無事に彼が帰還することを祈ろう、とロバートとアン。ルースが部屋から出てきて、弟デイヴィッドの従軍を確認し、ダブリンからの極秘情報——守秘をロバートに約束させる——によれば、ウルフ・トーンが2万人のフランス軍を率いて上陸、マクラッケン(Henry Joy McCracken, 1767-98)が1万、マンロウ(Henry Munro)も7千の兵で進軍予定で、数年前は不運な事情で失敗したけれど、歴史はまもなく自由元年を迎える、と英国への嫌悪をあらわにし、アンと口論になる。ルースは、〈オレンジ協会〉は就寝中の無辜の民を襲撃するが、〈統一アイルランド人連盟〉側は、抵抗さえなければ、無血の名誉革命を目指すものだ、と主張し、〈オレンジ協会〉の侵攻開始について、一刻も早く愛するハリーに伝えに行かねばならない、と飛び出そうとする。いま家を出るなら、即刻勘当し、二度とこの家の敷居をまたぐことは許さない、とロバートは迫るが、ハリーが死ねば家族の絆も崩壊する、自分には他に道はない、とルースは出ていく。追いかけて、というアンの願いを聞き入れず、ロバートは部屋を歩き回る。溶暗。

第2幕。夜明け時。ルースとハリーが入ってきて、服や靴など身の回り品をシートにくるんで運び出そうとするが、眠っていると思われたアンが声をかける。オレンジ会員による略奪や殺戮を目の当たりにしたルースは急いでいるが、オート・ケキの食事を勧めるアンにハリーは応じる。ハリーが漏らした〈ペルファースト行き〉を誰にも他言せぬようにルースはアンに誓わせる。アンは寝室からルースの母親マーガレットの形見の白いドレス、ルースがデイヴィッドに読みを教えた聖書、生まれる弟(デイヴィッド?)のためにルースが作りかけていたハンカチ(母親はこのときの陣痛で亡くなった)、さらには自分の結婚指輪を必要なら持っていくように勧めるが、胸がせつなくなったルースは断る。しかし、ハリーはそれらすべてを代わりに受け取り、アンに促されてロバートの帰りを待つことにする。娘の姿を見かけて急いで戻ってきたロバートは、戸外は危険だから家にとどまり、〈オレンジ協会〉地区会長を務めるサミュエルに直談判すれば、長年の知り合いだから、ルースの身の安全は保証できる、と説得する。ハリーは自分一人なら身軽にペルファーストに早く到着してしばらく待機し、平穏になったらまた戻ることができる、とこの提案に心を動かされるが、反乱支援者を虐殺する〈オレンジ協会〉が牛耳るこんな土地には暮らせない、とルースは反論する。革命思想を吹き込み、娘を奪われる憤怒にかられたロバートは、無抵抗のハリーに罵声を浴びせて挑発し、平手打ちを3発食わせる。我慢の限界に達したハリーがピストルを取り出すや、丸腰の敵に武器を使うのがお前の流儀かと、ロバートはさらに挑発。万人が平等で、出自・容貌・宗派の相違・信仰心の有無を問わない自由、束縛や隷属からの自由を自分は望んでいた、とハリーは反駁するが、「望んでいた」と過去形の発言をアンが鋭く指摘すると、彼はそれを認めざるを得ない。世の中の醜さを見せつけられ、アイルランドへの思いよりルースへの愛情の比重がいまでは圧倒している、として、ピストルをロバートに差し出す。ロバートはそれを壊して壁に投げつけ、家に残っているよう命じて、近所の警戒に

出ていく。フランス行きを考えるルースに、革命以後、餓死者が多いそうよ、とアンが異論を挟むと、(たとえ口コミでも、元を辿れば英国人に行き着くように) 英国人の視点で解釈された、ロンドン発情報ばかりがアイルランドに流れ込み、世論や判断を左右している、と大国のメディア操作をルースは批判する。突然、サミュエルがドアをノックする。ハリーは作業部屋に隠れ、ルースが対応する。サミュエルとウィリアム父子が、待ち伏せ襲撃で背中を刺されて出血が続くデイヴィッドを運び込む。俯せ寝より痛みの少ないように椅子に座らせるが、20マイル先にしか診療所はなく、濡れ布で額の熱を冷まし、痛み止めにワインを与えるしか、治療法はない。デイヴィッドが苦悶の悲鳴をあげ、隠れていたハリーが出てくる。サミュエルはピストルをハリーに向ける。ウィリアムは即座にハリーが敵の〈統一アイルランド人連盟〉の人間だと気づき、父親に告げるが、医者友人が近くにいる、とのハリーの言葉に、ウィリアムが同行する条件で医者呼びに行くのを許す。デイヴィッドが意識を回復し、父親ロバートもようやく戻ってくる。事情を聞いた彼は、ウィリアムに代わってハリーに同行すると申し出るが、サミュエルはこれを拒絶し、別のピストルをウィリアムに持たせる。ルースは、ウィリアム同伴は、秘密の野営地に案内させて仲間を虐殺する陰謀だと恐れ、単身あるいは父ロバートとの同行以外の条件に応じてはならない、とハリーに警告する。「人を一人殺してしまったのを後悔している、剣でそいつの体を突き刺した、その弟らしき男の啞然とした表情を見せたかった、地獄に落ちたくない、助けてくれ、父さん」、と断末魔の苦しい声で語るデイヴィッドを尻目に、ハリーの派遣条件をめぐるサミュエルとロバートの対立は延々と続き、ついにデイヴィッドはこたえられる。息子を亡くした男は大勢いる、というサミュエルの冷淡な台詞に激怒したロバートが殴りかかろうとするのを、背後からウィリアムが襲い、たたきのめす。そして仲間の野営地の場所を教えるようにハリーに迫る。おとなしく隠れていることもできたのに、デイヴィッドの命を救おうと姿を現したのは勇気ある行為だ、とアンはハリーを擁護するが、通じない。デイヴィッドが死んだいまとなつては教える理由もない、と拒絶するハリーの胸をサミュエルは殴りつけ、ルースとウィリアムはつかみあいになるが、ハリーを自由にするなら野営地へは私が案内する、とルースは提案する。これまでのサミュエルの行動は個人的名声はもちろん、〈オレンジ協会〉や神、英国国王の名前を汚すものだ、と訴えるハリーの胸にサミュエルはいきなりピストルを発射し、剣も抜いて、ロープをウィリアムに持って来させる。即死のハリーを抱擁してキスするルースは遺体から引き離され、寝室に逃げ込む。気絶していたロバートは亜麻布で作業部屋の織機に縛りつけられる。(以後、必死に解こうともがくが、無益に終わる。) 5つ数える間に部屋から出てこなければアンの頭を撃ち抜く、とサミュエルは脅迫し、カウント・ダウン2で姿を見せたルースの両腕をウィリアムはロープで後ろ手に縛り、輪縄を首にかける。しかし、ハリーの死は彼女から恐怖心を奪い去っており、いくら脅されようとも彼女が情報を漏らす気配はまったくなく、従容と死に赴く覚悟ができています。吐かなければアンを先に殺す、という脅しに、ルースより先に死ぬほうがまだ、とアンが励ますので、今度は効果がない。サミュエルはルースの立つ椅子を蹴り倒して縛り首にしろ、と命じるが、悪魔に取りつかれたような異様な笑い声をあげるルースを不気味に感じてためらっていると、彼女の方から椅子を蹴り落として死のうとするので、ウィリアムはその両脚を必死につかむ。離せ、という命令に従わないウィリアムをサミュエルは引きずり、やがてルースの体は宙ぶらりんに揺れる。縛られたロバートは苦悶の悲鳴をあげる。多くの仲間の生命を犠牲にしたルースや〈統一アイルランド人連盟〉に正義の裁きをつけたのであり、理想のアイルランドを守るためにはまだまだやるべき仕事がある、とサミュエルはウィリアムを鼓舞する。ロバートの縄は解かれ、〈統一アイルランド人連盟〉の男を匿った反逆罪でルースを処刑した、とサミュエルは伝える。ロバートは居間に入り、手を貸そうとするウィリアムを払いのけ、自力で輪縄からルースをはずして、抱き寄せる。立ち去りかねるウィリアムに、いま

や肉親との死別は至る所で起きている、この家にいる人間が仲間だと思うから辛いだけで、本当の仲間は外にいて、国家再建のために頑張っている、とサミュエルは説き、一緒に立ち去る。アンはデイヴィッドの遺体を抱き、ロバートはルースの遺体を運び入れ、二人して抱き合っ、泣きながら祈りを捧げる。幕。

これほど冷酷非情で残虐な人物はいないのではないかと思えるのが、〈オレンジ協会〉地区会長のサミュエルである。組織の内部と外部の人間を明確に区別し、敵対する組織の人間は殲滅して当然であるという冷徹な思想は、まさしく狂信者の思想である。それに対してロバートは同じプロテスタントでも、過激な信念は抱かず、家族と生業に誇りを持つ穏健な考え方の人物である。その二人の子どものうち、息子は〈オレンジ協会〉へ、娘は〈統一アイルランド人連盟〉へと、対立する組織へと傾倒していく。どちらの陣営も互いに相手方を殺戮者として非難する。なにがいったい正義なのか、なにが正しい信仰なのか、なぜ和解ができないのか、この凄まじい憎悪の劇は読者／観客を途方に暮れさせる。

③『獣がまどろむ間に』(As the Beast Sleeps) 全10場。5場の後に休憩。

初演は1998年6月ダブリンのピーコック劇場。その後、2001年5月にベルファーストのリリック劇場、9月にロンドンのトライスクル劇場で上演。この作品はテレビ・ドラマ化⁶⁾され、2001年のエディンバラ映画祭で上映されたという。

1場。カイル (Kyle) とサンドラ (Sandra) 夫婦の家の居間。日中。カイルと仲間のフレディ (Freddie) が古い壁紙を剥がして、改装作業中。壁紙のゴミを2つ目の黒い袋に詰めて隅に放り、一休みしているとサンドラが新品の壁紙——サッカーの「レインジャーズ」の壁紙——を抱えて登場。作業前にシーツを捜しだして敷いておくべきだったのに、と注文。壁紙代はサンドラの母親から借りている。「レインジャーズ」関連グッズは正規店から購入してチーム強化費とすべきで、安くても盗品を扱っている連中から買ってはならない、とカイルは言うが、息子のジョー (Joe) に「レインジャーズ・ベッドカバー」を友だちが持っているから僕もほしい、とねだられているサンドラはフレディに闇市場でも入手を頼む。失職中のカイルに、自営業で独立することをフレディは持ちかけるが、まだ時期早尚だと繰り返すカイル。不景気でクラブからも締め出されたことをフレディはこぼす。カイルは頼れるラリー (Larry) に、クラブの件の解決や金を出してくれる (put his hand in his pocket, 15) よう頼むと請け合う。お茶を入れるのは順番制、と給仕を拒むサンドラにカイルは仕方なく台所に立つ。

2場。懲戒室。中央の机にラリーが座しているところへ、背広姿の政治家アレック (Alec) が登場。懲戒を受ける者の目の前で行動するのではなく、背後でなにもせず座って、ときおり凶器(ナイフや銃、庭鋏など)をさっとちらつかせることで、想像の世界を膨らませ、恐怖は倍加する、とラリー。かつてこの部屋で拷問を受けたカトリックは3人——警察から自白を強要してほしいと送られた男、穏健派政党に入ったヒューという男の妻と母親だという。「ユニオニストあるいはプロテス

タントだからといっていい人間だとは保証できない」とアレック。クラブ経営はジャック (Jack) に譲り、自分も政治の世界に入って、時流に乗り遅れたくない、なんとか上層部を説得してくれ、とラリー。

3場。夜のクラブ (バー)。サンドラにカイルが飲み物を持ってくる。フレディが現れ、賑やかに大声を出すので従業員ノーマン (Norman) から注意を受ける。フレディはサンドラをビリヤードに誘う。息子は実家の母親に預けているとサンドラが言うので、母親からの愛情が薄いと思ってしまうぞ、とフレディ。ジャックがバーに現れ、フレディはラリーの件を訊くが、本人が来たら分かる、と取り合わない。かつてビールを盗んできてやったお陰でこのクラブは繁盛した、とフレディは怒る。酒をお代わりしたいが、フレディもサンドラも持ち合わせが余りない。

4場。日中のクラブ従業員事務所。ハソコンに向かうジャックを、昨夜の負傷で片腕を吊り包帯のノーマンが訪ね、妻キャロライン (Caroline) が週給200ポンド以上なら引き受けるというが、税引き後180ポンドでも常勤なら昇給していく、とジャック。彼は、今後はきっちりと帳簿に従って税や証書、年金・保険計画を考慮したクラブ経営を進めていくのだという。ノーマンは店の治安担当員 (Officer in Charge of Security) に任命されたが、制服の支給や従業員増員はないと聞いて、がっかりする。店舗改装費用の借金を完済すれば、以後は収益はそのまま純益になる、とジャックは将来構想を語る。ラリーが登場。すぐ後からカイルが追いかけ、締め出そうとするノーマンの痛い腕をつかむが、いったん中座する。売上高も先月に続いてまずまず、ちょっとした「平和の配当」 (peace dividend, 39) に恵まれているが、カイルやその仲間たちが騒いで他の客の迷惑になっている、とジャックはラリーに訴える。さらにまた、本来なら5年計画で借金返済に当てたいのに、毎月アレックに小切手を渡さねばならないのはきつい、と返済計画を入力したフロッピーを渡そうとするが、ラリーは受け取らない。高い得票をあげればアレックの権力が高まり、俺たちも恩恵に預かる、とラリー。カイルを招き入れる。ラリーは、現在は困難な移行期にあり、好むと好まざるとにかかわらず、世の中はたしかに変化したし、これからも変化し続けるだろう、と話し出すが、カイルはまず、仲間2人のクラブ出入り禁止を解除してほしい、と申し出る。この件が初耳のラリーは即座にこれに応じるが、フレディだけは認められない、とジャックは反論。カイル同伴の条件ならどうか、と妥協案をラリーは示す。クラブのために尽くしてきたのだから、只酒にありついても当然だと思えるし、他の客とのいざこざが嫌なら俺たち専用のスペースを提供してほしい、とカイルは願い出る。ラリーは承諾し、ジャックも不承不承従う。今度は、ラリーがカイルに組織の「変節者」 (Renegades) をこらしめる「懲罰隊」 (punishment squad, 48) の任務を引き受けてほしいと依頼する。われわれはアルスター防衛のみを目的とする「アルスター防衛協会」 (the Ulster Defence Association) に属しているが、指導部の判断では、アルスターは現在のところ攻撃を受けておらず、防衛する敵もない、従って一歩退却の姿勢をとる段階にある、とラリーは説明。その現状認識は違う、とカイルが反論すると、われわれは考えたり質問したりする弁論部員ではなく、命令に忠実に従う兵士であり、銀行強盗や酒・タバコの大量窃盗もたしかに偉業だが、そういう時代はもう終わった、フレディをはじめとするカイルの仲間のなかには、残念ながら戦う相手を間違えて、もめごとを起こすだけの者もいる、とラリー。カイルはその件は解決するとして、懲罰隊の任務を引き受ける。

5場。夕方の居間。大型ラジカセで音楽を流しながらフレディが幅木にペンキを塗っているとサンドラが登場。バーで玉突き棒を振り回していたが、誰もかかってこれなきゃ時間の無駄だと棒を投げつけ、ノーマンと喧嘩になったことを身振りを交えて語って聞かせる。二人は昔話に移り、かつてのクラブでは気のおけない者同士の暖かな交流があったが、最近はすっかり様変わり、カイルもテレビばかり見て無為に過ごし、BBCの「アイルランド」特派員という言葉に「北アイルランド」じゃな

いか、〈英国〉放送協会はアイルランド共和国のカトリックの手で運営されている、と文句を言うくらいが関の山の〈すごいプロテスタント〉(Super Prod, 55)に最近ではなくなってしまった、とサンドラは嘆く。人々に分からせるためには言葉ではなく、なにかどでかいことをやってのけるしかない、とフレディ。壁紙作業を再開した二人にカイルがビールを抱えて帰宅。騒動を起こしたクラブにまた飲みに行こうとフレディを誘うが、彼は断り、テレビで報道される和平プロセスの進展は、統一アイルランドへの進展だ、と憤る。カイルは、うまく話をつけて立ち入り禁止を撤回させ、店の奥にわれわれだけの指定席空間を確保したことを伝える。初めは喜んだフレディやサンドラだが、クラブの経営者のほうこそ頭を下げて自分たちを招くべきだ、と反発し、フレディは出ていく。和平プロセスの進展に伴い、従来の不法行為を禁じられて収入の道は途絶え、ロイヤリストとしての活動任務も閑古鳥。といて、自分には地道な肉体労働(道路掃除や溝さらい)はできない、「懲罰隊」は押入り強盗やシンナー遊び連中の仕事だが、組織の〈統制をとれ〉(in line, 64)と上から指示を受けた以上は遂行するしかない、断れば目をつけられているわれわれが逆に懲罰の対象になる、とカイルは力説し、サンドラに協力を依頼。二人は互いに見つめあう。

6場。午前中の懲戒室。ラリーとアレックが会談中。政界入りを望むラリーに、自分が属する政党は小さい政党で一部の人々にしか役立てない、もう少し時間の猶予を、と釈明してアレックは立ち去る。ノーマンがカイルとジャックを案内。カイルが呼び出されたのは、昨夜このクラブが覆面2人組に襲撃され、うち一人は声や背格好からフレディと判明、もう一人が誰なのかを聞き出すためである。ドア監視役のノーマンがいきなり金床(crow-bar)で殴られて気絶させられ、気がつくときジャックに介抱してもらったという話を聞いて、カイルは、ジャックの仕組んだ保険金目当ての狂言強盗ではないか、と反発するが、盗まれたのが3万5千ポンド(約700万円)もの大金と知って驚く。アレックの選挙運動資金に用立てるためにもどんなことがあってもその金は取り返す必要がある、とラリー。フレディが真犯人かどうか確認をする、とカイル。

7場。午前中のクラブ従業員事務所。計算業務中のジャックに、なぜ数字を書き替えるのか、と質問するノーマン。領収書の紛失やパーティーの着服などで計算が合わないことがあるからで、そうした盗みを勘案して安月給にしている、とジャック。アレックとラリーが登場。レジの端金^{はしたかね}には手をつけず、金庫の3万5千ポンドだけを狙った犯行で、一人はフレディに間違いはない、とジャックは説明。アレックは、わが党の執行部がラリー擁立を見送る決定をしたと伝えた途端に、献金約束の大金が行方不明になるとはおかしな偶然だ、と強盗事件の信憑性を疑う。アメリカを歴訪して各界のトップと会見し、アルスターの置かれた状況をきちんと聞いてもらうためには、一流の服装や宿泊施設、食事のための資金が必要だ、というアレックを遮って、ラリーは反論——かつて、友人の息子で化学の得意な若者を親身になって爆弾テロリストに育てあげたが、和平プロセスのせいで爆破活動は禁止され、逆に彼を肅正する指示を受けて、彼の脚を不自由にせざるをえなくなった、テロを思いとどまらせられなかったのは、最初はテロの必要性を説きながらいまでは和平プロセスを擁護する自分自身の変節ぶりに説得力がなかったため、アレックはテレビの政治討論会で新しいユニオニズムなりなんなり勝手に喧伝してくれ、俺はこの件を片付けたら組織から引退する——そう宣言して、ラリーは退出。

8場。日中の居間。壁紙作業のフレディのもとにカイルとラリー。強盗事件の関与の有無をフレディに問いただす。おとなしく金を返すならば、なにもなかったことにする、と提案するラリーに、フレディは金と引き換えに(大量の)銃を要求する。カトリックとプロテスタントの憎悪の対立はこれからも続くが、プロテスタントが優位で勝算のあるいまのうちに戦いを挑まねばならない、いずれ軍隊は撤収され警察の風紀は緩み、跪いて生きるよりも弁慶の仁王立ち(to die on your feet, 82)が

ました、ペイズリーやロビンソン大統領、ラリーのUDAに仕えて待ち続けてきたが、もう限界だ、武器を持って祖国防衛に立ち上がろう、かつて英雄視したラリーがこんな卑小な男だったとは嘆かわしい、と反論し、笑って立ち去る。ラリーはカイルに自らフレディを始末するように命じる。

9場。夕方の懲戒室。椅子に縛られたフレディの背後に立つカイル。その後ろに離れてラリー、ジャック、ノーマン。共犯者の名前を白状するようにフレディを痛めつけるカイル。拷問場面に耐えられないジャックは席をはずしたが、唯一の目撃証人ゆえに、カイルは退席を認めない。フレディは縄を解いてくれ、と訴えるが、聞き入れられない。強盗も殺人も実の兄弟のようにともに行動してきた、妻や息子にどう釈明するんだ、とカイルの情に訴えた後、〈共犯者名は黙秘するが金は返す〉という条件を持ち出す。代わりに拷問係を務めようとするノーマンをカイルは殴り、棍棒を奪う。カイルが味方に回れば2対3だ、と裏切りをけしかけるフレディに、いや、1対数千だ、とカイル。統一アイルランド国で息子ジョーが司祭に性的虐待を受けるのを黙って眺めるのか、とフレディ。カイルは説得をついに断念。ノーマンが棍棒で乱打を浴びせ、フレディは血まみれになる。殺害を示唆するジャックに、病院に連れて行き、二人きりになれば自白させられる、とカイルは反論するが、報復を恐れるノーマンは棍棒でフレディをまた殴りつける。カイルは棍棒を奪い、フレディの脈を診て、もしものことがあったら金の在処がわからなくなる、と叱りつける。ラリーは諦めて部屋を出ていく。カイルをやっつける絶好の機会がきた、とジャックはノーマンと共謀してカイルを威嚇するが、フレディが死んだ様子に、二人は立ち去る。カイルは脈を確かめ、フレディの体を抱き上げて運び出す。(死んではおらず、病院に連れて行ったことが次の場で言及される。)

10場。夜の居間。カイルの帰宅にサンドラが起きる。息子はやはり実家の母親のもと。いまから迎えに行つて、昔のように親子3人で川の字に寝てテレビでも見ないか、と声をかけるが、サンドラは、あなたは昔のカイルじゃない、別人だ、と応じない。カイルはフレディに新しい仲間はいないか、と問いたが、サンドラは否定。事件当夜のアリバイを訊くが、いっこうに答えない妻を壁に押しつけ、なんてことをしてくれた、と激怒するカイル。その顔にサンドラは唾を吐きかけ、ゆっくりと歩いて家を出る。カイルはシーツの下の電話線を辿って電話を見つけ、ダイヤルを回すが、発信音を聞くや受話器を電話に叩きつけ、壁に放りすてる。座ってビールを飲み始め、彼の笑い声は次第に大きくなる。幕。

和平プロセスの進展によって、犯罪が生業を支えていた裏社会の風土も変化していく。和平交渉に関与する政治家がテロ組織からの資金提供を受けている実態や、反カトリックの考えが染みつき、いまさら暴力以外の選択肢など考えられないフレディ、歴史の潮流の変化に当惑し、信念の拠り所を失って、なにを信じてよいのか分からないラリーやカイル——ベルファーストのユニオニストの人々の苦悩を描くこの作品は、過激派内部の内ゲバめいたリンチの惨たらしさに目を奪われがちだが、家族や友人の絆、国家や組織への忠誠心のありかたに根源的な問いを投げかけている。

フレディの共犯者は果たしてサンドラなのか、もしサンドラであるとすればなぜ犯行に荷担したのか、盗まれた金はどこにあるのか、こうした疑問は解決されずに幕を閉じる。推理劇として読めば、そこに物足りなさは感じられるものの、拷問の際のフレディの笑い声や終幕のカイルの暗い笑い声にこめられた、やりきれない絶望感は、

読者や観客の胸に深くしみいるだろう。(なお、標題「獣がまどろむ間に」に典拠があるのかは不明。テキストでこの表現はまったく用いられていない。)

④『信頼』(Trust) 2幕全8場 5場(1幕)と3場(2幕)

初演は1999年3月11日、ロンドンのロイヤル・コート劇場アップステアズ。

第1幕。

1場。ジョーディ・マクナイト (Geordie McKight) の自宅居間。主人のジョーディとその相棒アーティ (Arty) はテレビの競馬中継に見入っている。床にははずれ馬券が散乱。15歳の息子ジェイク (Jake) は台所でお茶をいれている。障害物競走が始まり、鼻頂の馬がまたしても3着で敗れるをアーティは悔しがる。ジョーディは緑の帽子の騎手に賭けたと言うが、アイルランド共和国を象徴する緑を嫌う彼が、本当にそんなことをするとは思われない。競馬中継が終り、ジェイクはアニメ漫画か映画の番組を見たがるが、父親に駄目だといわれ、数学の宿題にとりかかる。ジョーディはコップやスプーンでわざと音を立てて息子の勉強の邪魔をする。馬券を買い出してから算数が得意になった、とアーティが言え、ジョーディも昔は買い物のお使いなどの日常生活で計算は覚えたものであり、勉強よりも友達とサッカーをしたり、試合を見物しろ、と勧める。母親マーガレット (Margaret) が玄関から帰宅。ジェイクは二階の自室に上がる。彼は学校で苛めにあつて悩んでいるのかよく頭痛がすると訴えるが、学校の教師たちは実態を把握していないし、ジョーディは他人のお節介は焼くのに息子のためにはなにもやろうとしない、と憤懣やるかたないマーガレット。ドアベルが鳴り、ジュリー (Julie) が到着。ジョーディが台所でお茶を入れる間、彼女のボーイ・フレンドのヴィンセント (Vincent) の話題 (軍隊勤務だが、辞めるかもしれない、など) が交わされる。ジョーディが戻り、今度はマーガレットがビスケットを取りに中座してすぐ戻るが、ジュリーに相談事がある気配を察してジョーディは妻に席をはずさせる。ジュリーが話し出すや、またドアベルが鳴り、トレヴァー (Trevor) が来訪。ジュリーは別の用事を思い出した、とアーティとともに帰る。トレヴァーの来意は、ジョーディに職の斡旋を頼むためであったが、自分も失業中の身のジョーディはここは職安ではない、と苦笑する。しかし、13年の刑期を終えて娑婆に戻り、母親に促されて初めて頼みごとをしにきたのに馬鹿にされたと感じた彼は憤然と帰ろうとする。ジョーディとマーガレットは彼を押しとどめ、落ち着かせた後で、仕事を斡旋する筆頭候補に置く、と保証する。トレヴァーは喜び、どんなやばい仕事でもかまわない、と帰っていく。

2場。ジュリーのアパート。夜。ヴィンセントはベッドでビールと煙草。ジュリーが浴室からバスタオルを巻いて出てくる。タオルをはずすと、下には超ミニのドレス。100ポンドもした高価な代物にヴィンセントは仰天するが、ウェイトレス勤務のジュリーがクリスマス休暇を無理に取ったと聞いて喜ぶ。ジュリーは彼の力瘤を障り、脇の下をくすぐるので、二人そろってベッドから落ちるが、ヴィンセントが彼女の下敷きになる。彼女はやがて、ジョーディを訪問したことを打ち明ける。もう北アイルランドにいられなくなる、と心配するヴィンセントに、人を好きになったら全身全霊で愛する、と彼女からヴィンセントにキスし、ベッドへ誘う。

3場。クラブのバー。ジェイクを中央にジョーディとアーティがテーブルに座る。ジョーディは息子にビールを勧めるが、まだ飲んだことはないし、飲めば母さんに叱られる、と答える。アーティは、父親のビールをこっそり盗み飲みした経験を話す。グラスを合わせて飲み始めたジェイクは顔を歪め、まずい、と漏らす、と漏らす、と漏らす、と漏らす。ジュリーが相談事の続きに店に現れる。アーティ

が、彼女の恋人は乱暴者のホモだと決めつけるので、口論になり、ジョーディはアーティにビールを買いに行かせる。ジョーディは息子に煙草を勧めて大人扱いする。アーティからなにも伝わっていないと知ったジュリーは、借金の申出を受け入れて貰えるものと理解していたが、ジョーディはそれは見当違いで、頼み事をする側は下手に出るのが礼儀であり、まずヴィンセント本人に引き合わせることを命じる。彼女は了解して、立ち去る。ジュリーのいる間、格好をつけようとビールのお代わりをしてトイレに立ったジェイクは、ジュリーに気づかれたか、と知りたがり、[このあたり、もしかすると、放尿以外の性的行為の暗示があるのかもしれない。] もう家へ帰って良いか、とジョーディに尋ねるので、許可はもらえない、自分で考えて判断しろ、とジェイクに論じ、アーティも別れの挨拶を実演して見せる。ジェイクはアーティの祝杯を断って、出ていく。残された二人は彼のために祝杯を上げる。

4場。居間。同夜。トレヴァーが食卓にいて、マーガレットにジェイクの学校でのいじめの実態を報告する。校内では悪口(slagging)程度だが、下校時に上級生、とくにターキングトン兄弟(Turkington)がいじめの主犯格で、最近東ベルファーストから転校してきた彼らには、さらに20代の兄が2人いるという。そこへクラブからジェイクが帰宅する。情報のお礼に、マーガレットは缶詰やジャガ芋を袋に詰めてトレヴァーに持たせる。ジェイクは頭痛がするので鎮痛剤(Paracodol)を探すが、あいにく切れている。マーガレットはターキングトンの名前を持ち出して、トレヴァーの甥もこの不良兄弟に苛められているから、トレヴァーが連中と話をつけるのに手を貸してほしい、と切り出す。ジェイクは甥の存在を怪しみ、ターキングトンなど知らないし、余計な手出しをすればますます悪くなる、と拒絶し、頭痛のするこめかみを押さえて、二階へ逃げる。このまま放置すれば、息子が弱虫だとみなに知らせるようなもので、なんとかしなければ、と悩むマーガレットに、まずターキングトンの弟の方を懲らしめて、誰に対してもいじめはするな、と警告したらどうか、とトレヴァー。それでは外的な要因は除去できても、ジェイク自身の内面を変えなければ将来、また同じ事が起こるはず。マッチョ・タイプではないトレヴァーが生徒時代にいじめに会わなかったのは、周囲から敬意を抱かれていたからで、ジェイクもそうなるためには、解決策に直接関与しなければならない、とマーガレット。ジョーディとアーティが帰宅。トレヴァーは立ち去る。留守中にもジョーディに助け(深夜にも騒音をまき散らすパンク連中の取締り要望)を求めて、来客があったことを伝えるが、UDAは民事介入の警察とは違う、と一蹴するジョーディ。他人の面倒はみても、不登校の息子の心配はしない、とマーガレットが腹を立てると、いつまでも小学生扱いするな、医者には偏頭痛(migraines)でもなんでもないと診断だし、クラブでは元気澆刺としていた、とジョーディ。癌も直せない医者になが直せるのよ、戻るとすぐに鎮痛剤を必要としたわ、とマーガレット。ジョーディとアーティは退散する。

5場。夜のノッカ・モニュメント(Knockagh Monument)。大戦で英国人とともに戦死したアントリム州の人々を追悼する記念碑の献花を見て感傷的になるヴィンセント。滅多に人が訪れず、カー・セックスの名所としてノッカーラップ(Knockherupagh)・モニュメントの異名を持ち、付近には自殺の名所もあるわ、とジュリー。やがて車が1台近づき、ジョーディとアーティが降りる。早速に前金で半額を要求するヴィンセントに、自分には決定する権限もないし、前金は用意していない、とジョーディ。交渉は即時決裂し、ヴィンセントはアーティの首をつかんで銃を押し当てるが、諦めて離す。あくまで半額の先払いを主張するヴィンセントと、一括後払いにしか応じないジョーディ。ジュリーはヴィンセントと協議し、明晩もう一度ここで会って金と銃を交換する、ただし二倍の数の銃を準備するから金も倍額だ、とヴィンセントは提案。倍の銃の半分を半額で貰おう、と最初の取引条件に固執するジョーディ。(幕間)

第2幕。

6場。2日後の夕方の居間。アイロンがけのマーガレットにアーティはジェイクの様子を尋ねる。登校するようになったものの、別のいい学校に入れておけばいじめに会わなくてもすんだものを、とマーガレット。ジョーディは、同じラスクールに住む知人が息子を名門校にやったものの、労働者地区出身で蔑まれて友だちもできずに挫折した例を持ち出すが、入学当初は全Aだったジェイクの成績が急降下したのは、教師の質が悪いせいであり、いまの学校に通わせているのは、サッカー選手にして活躍させたかっただけ、とマーガレットは反論。そこへトレヴァーが来訪。彼はマーガレットの要望に応えようとしたが、失敗した経緯——弟のターキングトンを呼んで説教し、体を押さえつけて、ジェイクにこいつを殴れ、と命じたが、彼は応じなかった、そこで代わりに自分が弟を殴っていると兄が登場、弟は仕返しをするぞとジェイクを罵り、彼は泣き出した、気がかりになったので自己防衛用にナイフをジェイクに持たせたが、ターキングトンは警察一家でもある——を伝える。マーガレットは息子を迎えに行く準備を始める。暴行傷害を密告されたら、と我が身を案じるトレヴァーに、もしナイフが敵の手に渡って息子が刺されたらどうするの、と逆上してアイロンを台に繰り返したたきつけ、猛然と飛び出す。ジョーディも彼女の後を追う。

7場。夜の森のなか。幹線道路を離れて国境地帯を進むヴィンセントとジュリー。国境警備兵の動きを警戒するヴィンセント。兵舎からマシンガンや銃を盗みだして準軍事組織(UDA)に売り渡し、姿をくらましている以上、緊急配備が敷かれているはず。ヘリコプターが近づき、サーチライトが走るなか、地面に腹這いになる二人。観念したヴィンセントは武器を捨て、両手を上げる。すべて自分の単独犯行で、きみは武器取引をはじめ、なにも知らないことにするんだ、と逮捕後の対応を説くヴィンセントに、言われるまでもなく無関係に決まっている、とジュリー。

8場。翌日の午後の居間。ジェイクは不良少年を刺して勾留中でマーガレットが付き添っている。刺された少年は入院中。ヴィンセントとジュリーの事件は報道されないが、どちらかが密告したなら、われわれはすべてを否定して、ヴィンセントのせいになれば、取引相手がIRAの可能性も疑われるだろう、とジョーディ。トレヴァーの消息は分からない。マーガレットがジェイクを連れて帰宅。ターキングトンが告訴を取り下げる可能性があり、保釈になったと言う。みんなの前でズボンを脱がされかけたので刺した、と涙で訴えるジェイク。もとはと言えば、トレヴァーに余計な真似を頼んだお前の責任だ、とジョーディはマーガレットをなじるが、無策のジョーディにこそ責任がある、とマーガレット。取り調べに立ち会った軍関係者から、取引された盗品の銃を返還すれば、ジェイクを不起訴処分にする提案されたマーガレットは、夫とアーティに銃の隠し場所を迫るが、答ええない。(銃の存在をマーガレットは取り調べにおいては否認している。)トレヴァーが鞆を持って登場。中から銃を2丁、マーガレットは取り出す。マーガレットはジェイクを監獄に入れぬために銃の在処を白状させようと、ジョーディに銃口を向ける。ジョーディはシャツの胸をはだける。マーガレットは引き金を引くが、空砲だった。ジョーディはトレヴァーに暴行の自首に向かわせ、出ていく。残されたマーガレットは6週間の拘留でも息子には無理だと考えて、受話器をとり、銃は返還できないがほかに情報がある、と警察に通報する。

この作品もまた家族の絆のありかたにを深く再考を迫るものである。夫婦の信頼、親子の信頼、恋人同志の信頼、組織や国家への信頼、さまざまな次元でなにかを信じることの意味を考えさせられる。

⑤『変革の力』(The Force of Change) 2幕

初演は、2000年4月6日、ロンドンのロイヤル・コート・ジャーウッド劇場アップステアズ (Royal Court Jerwood Theatre Upstairs)、同年11月2日に同じ劇場のダウンステアズでも上演された。

舞台は、2000年5月5日(金)早朝8時すぎ、北アイルランドのアントリム・ロード警察署 (Antrim Road Police Station) 内の二つの取調室と通路。

第1幕。孫もいる57歳のビル・バーン (Bill Byrne) 巡査が取調室Aでテープ収録⁷⁾の準備を終えると、35歳のキャロライン・パタソン (Caroline Patterson) 巡査部長が到着。ビルの珍しい早出を皮肉ったあと、自宅に携帯電話を入れ、息子ヘンリーの旅行を許可するかどうかをめぐって夫ハリリー (Harry) と意見が合わない様子。37歳の同僚マーク・シンプソン (Mark Simpson) 巡査部長の到着で嘘をついて電話を切り上げ、彼の勧める紅茶が砂糖入りなので断る。数時間後に証拠不十分で保釈となる、28歳のUDAメンバーの容疑者スタンリー・ブラウン (Stanley Brown) を担当しているキャロラインは苛立っている。現職に昇任したときも他の男性警官の視線は冷たく、警部補による彼女の勤務評定とさらなる昇格推薦書の提出を明後日に控え、自分がミスするのをみなが虎視眈眈と窺っているように彼女は感じている。戻ってきたビルに5分後に取り調べ開始を伝えるが、ビルは土曜の晩にパブで聞いた卑猥なジョークの受け売りを始めるが、パブの名前は言い淀み、席を外すように女から命令されるのを侮辱に感じてのろのろと従う。まもなく窃盗車両による暴走容疑の19歳の若者ロバート・モンゴメリー (Robert Montgomery) が署に連行され、スタンリーがこの男をテロ組織に勧誘した疑いがあるという情報をマークは伝えたあと、キャロラインを昼食や勤務後の酒に誘うが、交際女性がいることを知っている彼女は断る。マークはなおも、今日の取り調べがうまくいけば祝賀会、不首尾なら慰労会の名目でデートに誘うが、彼女は応じない。ロバートの調書ファイルのコピーをビルにとらせようとするが、嫌がるだろうからと拘置所担当官ジュディ (Judy) にコピー依頼をマークに命じて、ファイルに向かう。

取調室Bにいるマークに30歳で独身のデイヴィッド・デイヴィス (David Davis) 巡査が合流、ロバートが〈ラビット〉という渾名で呼ばれるのを好むのに関して、デイヴィッドの渾名を尋ねるが、自分は一度も渾名で呼ばれたことはない、と答え、調書ファイルコピーの依頼を自分が引き受ける。スタンリーの取調べも自分たちがやれば5分で落とせるのに、キャロラインならしくじるに決まっている、と言って立ち去る。

取調室Aでビルがキャロラインに今日の尋問作戦について尋ねる。昨日はキャロラインが〈優しい警官〉、ビルが〈怖い警官〉という古典的な硬軟使い分けの役割分担で攻めたのに、急にキャロラインが、キレて喚きちらしたから失敗したと非難すると、筋書きの読めない展開にして容疑者を混乱させるのが狙いで、今日もアドリブで攻める、と苦しい弁明をする。ビルは彼女の手法についていけないこと、家族から私用電話が入るたびに席をはずさねばならない(彼自身は伝言用マナーモードにしている)ことを警部補に直訴した旨を告げると、今後はポケベルに換えて、呼び出しがあれば自分が退室する、と彼女は提案する。ビルが「黙秘男」(‘Muteman’) スタンリーを連れてくる。これ以降の尋問では、スタンリーは一貫して黙秘を続ける。キャロラインは映画『レザボア・ドッグ』の偽名を使ったギャングの話を持ち出し、UDAもそうしたコード・ネームを使うのか、スタンリーの渾名はなにか、などと、まずオフレコの会話を始める。拘置所担当官ジュディからお茶を貰ってくるようビルに言いつけて離れさせ、なおも映画の趣味の話題を続けながら、ファイルを繰って、ポルノ商フ

イリップスが両膝を狙撃される犯行現場を目撃した婦人の証言や、スタンリーによるウォーカー酒店強盗事件を目撃したロレンス老人の証言が後日、撤回・変更されているのは、彼をはじめとするUDAによる脅迫のせいに違いない、と指摘し、北アイルランドのプロテスタント防衛という目的で結成されたはずのUDAが現在ではただの犯罪者集団に成り下がっている、と厳しく非難する。規則でお茶を貰えずに水だけ持ってビルが戻り、テープ録音による正式尋問が開始される。立ち会い警官の所属や姓、時刻、被告の法律上の権利の説明などを吹きこんで、一問一答形式の尋問が始まる。もっとも、スタンリーは黙秘を通してしているので、「被告はなんの身振りも示さず、否定しようとはしなかった」というビルによる実況説明が6度行われ、痺れを切らしたキャロラインは席を立てて大声で罵り、被告から水とタバコを取り上げる。ビルはその行動までテープに吹き込む。キャロラインは録音を停止して、休憩を宣して退室。ビルが差し出すタバコをスタンリーは受け取る。

取調室Bでは〈ラビット〉の尋問がマークとデイヴィッドの二人によって行われている。別室にいるスタンリーからUDA入隊の誘いを受けたか、との問いを〈ラビット〉が否認すると、それは認めたと同じこと、なぜならUDAメンバーだと主張する奴は自慢したいがために法螺をふく、違うという奴こそ実はメンバーなのだ、と二人はその後もおとぼけ漫才コンビ (comedy duo) よろしく会話を続け、ときおり巧みな誘導尋問をまじえて〈ラビット〉を取り調べる。タバコを一服、勧められた〈ラビット〉は心臓発作で死ぬよりも時速160キロの暴走で死ぬほうがいい、と断る。やがて彼らは要点に入り、〈ラビット〉には3つの選択肢——①このまま否認を続け、少年院ではなく一般刑務所に長期服役、②UDAメンバーだと認め、同志とともに終身服役、③窃盗と暴走行為で告発されるが、情状酌量で保護観察期間2年と違反罰点のみ——があり、この③の選択肢を選ぶ場合の条件は2つ、——①今後は絶対に自動車窃盗と暴走を行わない、②スタンリーを告発できる情報の提供——だと告げる。〈ラビット〉がこれを拒否すると、二人はファイルから彼の前科を拾い読みしていく。市の中心部で車を盗んだあと、同じ男2人と女1人(毎回別人)を同乗させて徘徊暴走して衝突するパターンの事故記録を4件を示したあと、ただ1度だけ郊外で盗んだBMWに単独で乗車して郊外で事故を起こした今回の事例を示し、これは趣味の暴走以外の用事(スタンリーからの指令で、UDAのためにBMWを手配する用事)での乗車であったはずだと、迫る。単独乗車の事故は他にもあったはずだと、〈ラビット〉は具体的に反論するが、そのような調書記録はない、と二人は答え、警察は立件に有利なようにいくらでも調書を抹消(改竄)できるのだと示唆する。

取調室Aではビルが休憩前に収録したテープを整理している。それまで一言も発さなかったスタンリーは、キャロラインの氏名(ファーストネーム)、住所、電話番号、自家用車の車種、色、登録ナンバーをビルに要求する。

第2幕。同じ日の昼。スタンリーの拘留期限があと1時間後に迫っている。取調室Aでファイルを読んでいるキャロラインに、マークが中華料理店の持帰りの昼食を買ってくる。彼が海老クラッカーを食べ始めると、またキャロラインの携帯電話に夫から連絡が入る。息子の旅行に学校の先生が同行してくれることなどの家庭の話題を話して切り上げる。中華料理店から中華でなくチーズバーガーやチップスを買ってくるマークに呆れる。デイヴィッドが警部補からの依頼でビルを探しにくる(署内にもパブにも見つからなかったという)。例によって叱責だろうとマークは言うが、ビルが自分を内部告発しているのでは、とキャロラインは疑心暗鬼。マークは、かつての同僚で、あるカトリックの刑事がプロテスタントが牛耳る北アイルランド警察で同じように疎外感を抱いていたが、ちゃんと昇格した、という話を持ち出す。彼女はビルを人払いした間にオフレコで〈ラビット〉を匂わず言及をしたときに怪しい反応があったとマークに知らせる。ビルが戻ってくる。パブで昼食、と嘘をつき、警視に会っていたと言う(これも多分、嘘)。キャロラインがスタンリーを入室させ、午後の尋

問が開始される。ビルは意外なことに自分から尋問を始めると言い出すが、なにも切り出さずに部屋を出るので、録音を停止してキャロラインは後を追う。

通路。ビルは少しの時間でいいから自分をスタンリーと二人きりにさせてほしい、と頼むが、キャロラインは拒否。取調室に向かう彼女にビルは従う。

取調室A。すぐに取調べが再開されるが、テープ録音はされない。ビルは別室で取調べ中の〈ラビット〉が不利な証言を自白すれば、それに基づき告発できると述べ、スタンリーはUDAメンバーではあっても、運営を指揮している重要人物ではなく、末端の構成員の意向などお構いなしに、上層部の指導者が勝手に組織の方針に変更を加えているとして、現在進行している北アイルランドの和平プロセスを痛烈に批判する。ビルに言わせると、これは〈ナショナリスト・プロセス〉であり、連合を保証するトリンプルも領土条項を撤廃したアイルランド政府も信用できない、IRAからプロテスタントを守るために北アイルランド警察に入って30年、UDAはいわばその予備警察的勢力としてもにアルスター防衛の任に当たってきたが、英国政府がUDAを非合法化してから事態は悪化の一端を辿り、噴飯ものの「パッテン報告書」では警察官の非武装や警察解体までも主張される始末。カトリックの警官新採用や昇任平等という、人口構成比を考えれば逆差別の改悪人事が実施され、しまいにはIRAが北アイルランド警察をのっつてしまいかねない、誰も北アイルランドを守ろうとはせず、金に目が眩んだ政治家どもが国家を危うくしている、そうした腐敗した上層部の連中を処分して真にプロテスタント勢力を守るためにも、UDAの内部告発（密告）をしてほしい、と長舌で訴える。キャロラインも、情報提供がなされれば釈放する、と司法取引を保証する一方で、拒否してたとえ保釈になっても他の容疑者の裏切りによる再逮捕は免れない、と圧力をかける。ビルは再度ふたりだけの取調べを要請するが、キャロラインは頑として受けつけない。このとき携帯電話が鳴り響き、キャロラインは腹を立てて発信元を調べるが、鳴っているのは自分の携帯ではないことに気づく。スタンリーに両手を挙げさせてボディ・チェックし、なおも鳴り続ける携帯電話を発見する。このときスタンリーはキャロラインに初めて口を開き、「通路で拾った」と話す。自分が事務に届けると言うビルを無視して、キャロラインは携帯に残された伝言を再生して聞き、ビルに妻からの電話だと答え、取調室を出る。ビルは激昂するが、スタンリーはUDAの仲間からの通話でなくて幸いだった、さきほどのあなたの尋問の訴えは説得力があったから後で相談しよう、と答える。

通路。キャロラインはデイヴィッドに命じて、ビルを取調室Aから連れ出させる。

取調室Bで、ビルはスタンリーが自分の携帯電話をこっそり盗んだのだと弁明し、管理不行き届きで不面目だから警部補に報告しないように頼むが、キャロラインはビルがスタンリーに故意に貸し与えたのだと主張する。マークはキャロラインのいないところでビルに事情説明させる提案をし、ビルは同意、キャロラインも不承不承10分だけ中座する。問い詰められたビルは、これまで3度昇任候補に上がりながら見送りになり、昇任を当て込んで借りた借金が雪だるま式に増え、持ち家や車や妻も手放さなければならない窮地に追い込まれたため、警察情報と引き換えにUDAから金を得たこと、UDAはさらなる情報提供を迫って自分の家族まで脅迫した、と告白する。警察の不祥事がこれ以上表沙汰にならないよう、デイヴィッドは内部処理（もみ消し）を提案するが、マークにさらに問い詰められたビルが、携帯電話を与えたのはUDAがキャロラインを標的に狙っているため、彼女の住所と車の情報をすでに提供したと打ち明けるや、マークはビルに激しくつかみかかる。彼女の身边に危険が迫っていると判断したマークは、夫と子どもを安全な場所へ移すこと、ビルを事務所に連行しスタンリーと接触させないこと、携帯電話発信記録を調査することをデイヴィッドに命じる。マークから顛末を聞かされたキャロラインは激昂するが、気丈にもスタンリーの取調べを最後までやり終えたいと主張する。家族の安全確保、発信記録確認（すでに消去されたあと）をデイヴィッドが

報告。ビルを告発したがるキャロラインに、20項目にわたる彼女への苦情申立てがビルから提出されており、事を荒立てれば昇進に影響する、とマークはとりなす。ビルと同様に内心ではキャロラインを敵視していたデイヴィッドはキャロラインと激しく対立するが、まず〈ラビット〉の自白に全力をあげるのが先決で、ビルには病気を理由に1年の有給休暇をとらせたのち早期退職を勧告する妥協案をマークが提示、キャロラインは受け入れる。マークが〈ラビット〉を取調室に連れてくるまでの間にも、二人は激しくやりあう。マークとキャロライン両名による録音尋問が開始される。婦警相手に猥談を始める〈ラビット〉に、拘置期間延長を申請しなければこのまま護衛なしで保釈にせざるをえないが、彼にBMWを盗まれた過激派LVFの、こわもての二人組が物騒なネジ回しを手に警察署の正門に待機して〈ラビット〉の出署を待ち構えている、と真綿で首を締めるように脅迫し、キャロラインは保釈に備えて〈ラビット〉の服を取りに退室する。

通路。署から逃げ出そうとするビルをデイヴィッドがこのままでは懲戒免職だ、と思いとどまらせ、ともにスタンリー取調べに向かわせる。

取調室Aでデイヴィッドは、スタンリーらのUDAの行動は弱者苛めの犯罪にすぎないことを訴え、別室で〈ラビット〉がまもなく自白する、と迫るが、スタンリーはこれを聞いて高笑いし、〈ラビット〉はUDAメンバーではない、と警察捜査のお粗末さを嘲笑う。

取調室Bにキャロラインが〈ラビット〉の衣服を持ってくる。車を盗む指示を与えた人物の名前を供述するか、いまずぐ危険な釈放を選ぶかの二者択一を迫られた〈ラビット〉が、ついに観念して挙げたUDAメンバーの名前は、二人の期待を裏切る、トンプソン(Walter Thompson)という別人だった。キャロラインはこの密告の事実をトンプソン本人にばらす、とさらに脅迫し、スタンリーに関係する情報提供を執拗に要求するが、〈ラビット〉は安全の保証がない、警察よりもスタンリーの方が怖い、と拒み、マークはこれに激昂して暴力をふるい、なにも知らなければ捏造しろ、と偽証まで強要する。歯をへし折られた〈ラビット〉は弁護士との接見を要求し、キャロラインはその要請には対応する、と規則を順守して告げる。マークは憤然と取調室から出る。

取調室Aでは、デイヴィッドとビルがスタンリーを取調べ、同じプロテスタント仲間がまるで内紛のようにこうして対立している現状を皮肉ったあと、もしキャロラインとその家族に手を出せば警察も黙ってはいない、ギャングのような非合法的手段(卑劣な拉致・殺害)に訴えてもお前の命を奪ってやる、と脅迫する。そこへマークが取調室に入ってきて、保釈をスタンリーに伝える。これで安心というわけにはいかないぞ、という趣旨のデイヴィッドの台詞で幕。

『変革の力』の主題について

(1) 和平プロセスの進行とロイヤリストの疎外感

北アイルランド紛争は住民の間にさまざまな怨念やしがらみを増殖させ、もはや誰もが納得できるような形での意見集約は事実上不可能になっている。そのため和平プロセスは、世論の動向を汲みとりつつも、当事者の政党の指導者たちによるトップ・レベル交渉で妥協を模索しつつ進められていき、あくまで英国との連合を主張するロイヤリストの一部には、大きな不満が渦巻いているのも事実であろう。とりわけ、北アイルランドの将来の帰属を住民投票に委ねる方式は、2020年ごろ以降にはプロテス

タントとカトリックの人口比率が逆転し、プロテスタントが少数派に転落することが統計学的に予測されている⁹⁾以上、長い目で見ればプロテスタント側にとって敗北的な合意と言わざるを得ない。北アイルランド問題はやがて時間の経過とともに自然に消滅する、と言われる所以である。こうした政治的な〈変化〉についていけない人々、あくまで英国領として踏みとどまることを願う人々にとって、和平プロセス推進者は裏切り者に映って当然であろう。特定のイデオロギーに染め上げられた人間の意識改革は、理屈では考えられないほどの困難さを伴う。東西冷戦構造が崩壊しても社会主義や共産主義への不信感は減っていないし、右派・左派という二項対立図式の思考からも容易には脱却できない。ユニオニストにとっては、IRA に典型的なナショナリストと対決することがみずからの存在理由であり、いまさら和平を結んで仲良く平和共存しろ、と説かれても無理な要求なのである。この作品は、歴史の新しい潮流に取り残されてしまい、古い唄しか歌えないこうしたユニオニストたちの姿を浮き彫りにしている。

(2) 北アイルランド警察の変貌と女性差別問題

北アイルランド情勢は大きな変容を遂げており、この芝居が初演された2000年4月から1年半が経過した2001年11月4日をもって、北アイルランド警察はRUCという名称をPSNI (The Police Service of Northern Ireland) に改称して、英国王権と密接な関係のイメージを払拭した。1992年の時点で7.78%に過ぎなかったカトリックの常勤警官の割合も、今後大幅に引き上げられることも決定されている。

婦人警官が初採用された時期や婦人警官が占める比率や実数は調べ⁹⁾がつかないているが、2001年3月末日時点で北アイルランド警察の専任職員は7,810名、このうち74.5% (5,819) という圧倒的多数を占めるのが一般の「巡査」(Constable) であり、キャロラインやマークの職位である「巡査部長」(Sergeant) でも16.3% (1,278)、キャロラインがもしさらに昇任すればなるはずの「警部補」(Inspector) にいたっては僅かに5.5% (433) という狭き門である。巡査のまま定年を迎えようとするビルや、大卒で30歳の自尊心の強い巡査デイヴィッドが、必ずしも現場の尋問技術に長けてもおらず、家族からの頻繁な電話連絡を受け(公私混同とは言わないでも) 職務専念義務に違反する上司キャロラインを快く思わないのは、ある程度は理解できる。しかしながら、彼らの反感の背後にはやはり女性に対する偏見、〈女の上司に何ができる?〉という侮蔑感がみてとれるのもまた事実である。この作品は、男性中心の警察組織の出世(昇進)競争に女性が関与した場合の、複雑な構図を示している。

おわりに

2003年11月26日に実施された北アイルランド自治議会選挙の結果は、和平プロセスを批判するプロテスタント系強硬派の民主統一党(DUP)が第一党に躍進し、一方IRA系のシン・フェイン党もカトリック陣営では最大勢力に躍進し、反目しあう両宗派のそれぞれの強硬派勢力が互いに一步も譲らない対立構成¹⁰⁾を生み出してしまった。ギャリー・ミッチェルの作品は、和平プロセスに取り残されたロイヤリストたちの疎外感や閉塞感を描いたものだが、今回の選挙結果が示しているのは、そうしたロイヤリストたちの最後の抵抗であり、危機感をこれまでになく募らせたプロテスタント系住民が、歴史の時計の針を逆に回そうと懸命になって、和平合意そのものを覆そうとする民主統一党の支持に流れたものと思われる。北アイルランド問題の帰趨が最終的に決着する日まで、ミッチェルの伝えるロイヤリストたちの心情や思想にはまだまだ紆余曲折があることだろう。

注

- 1) 「北アイルランド問題は、宗教的な対立がそもそもの原因だと思われがちですが、それは大きな間違いです。たしかに表面的に見れば、イギリス派はプロテスタントであり、アイルランド派はカトリックなので、プロテスタントとカトリックの争いのように見えます。／しかし、本質はまったく違います。民族紛争、土地の領有権をめぐる争い、政治的な問題から派生した紛争なのです。宗教の違いが生んだ紛争では絶対にありません。／イギリス派の人たちはたしかにプロテスタントですが、その中で本当に真剣にキリスト教を信じている、敬虔なクリスチャンは三分の一いるかいないかです。残りの三分の二は、ただ単に伝統に従うだけのプロテスタントです。彼らは、結婚するときや子どもが生まれたとき、あるいはお葬式のときに教会に行きますが、それ以外にはほとんど行きません。／彼らは宗教にはほとんど関心を持っていないし、信じてもないのです。だからこそ、彼らはテロ組織を結成できたのです。事実、わたしはイギリス派のテロリストを何千人も知っていますが、宗教に関心のある人は一人もいませんでした。／わたし自身、テロリストとしてIRAと戦っていたときも、彼らがカトリックだから殺したいと思ったことは一度もありませんでした。… 宗教問題とはぜんぜん関係がないのです。／にもかかわらず、マスメディアはプロテスタントとカトリックの争いだと報道し、IRAはそれを上手にプロパガンダとして利用してきました。… 繰り返しになりますが、われわれは宗教戦争をしていたものではありません。」——ヒュー・ブラウン(Hugh Brown, 1957-) 『なぜ、人を殺してはいけないのですか』(幻冬社, 2001年), pp.73-75.

このヒュー・ブラウン氏を扱ったドキュメンタリー番組で、彼は流暢な日本語でほぼ同じ趣旨のことを次のように繰り返している。——「北アイルランドの紛争の問題は、宗教の戦争ではない。絶対、そういう問題ではない。あのお、宗教のために戦っている人は、私自身見てきたなかで、一人も会ったことない、見たこともない。ただ、プロテスタントという名前とカトリックという名前、とくにメディアはそれを使って、まあ、話聞いている人たちにとっていちばん分かりやすい区別するためにそういう言葉を使うけれども、北アイルランドではそういう言葉はもうほとんど使われませんね。… 宗教のために戦って

いると思っている人は一人もいないですね。」——『映像2000—北アイルランドからの使者』, 毎日放送, 放映日時不詳。発言は番組冒頭から13-14分ごろ。(資料を提供して下さい西村聖子さんに感謝申し上げます。)

- 2) 拙著『現代アイルランド文学序論』(近代文藝社, 1995年), p.2.
- 3) このときのレイの比喩は, 英国サッカーのプレミア・リーグで「レインジャーズ対ケルティック戦」が1-0に終り, レインジャーズのリーグ優勝, ケルティックのリーグ陥落が決まる, という好結果(39)。アイルランド系のケルティックに対する敵愾心が露な, ユニオニストらしい台詞である。
- 4) the peep-of-day boysとは, 武器類の発見のためにカトリックの家を夜明けに家宅捜索したプロテスタント組織で, 1785年から95年に活動。テキストは1798年の設定であるから, 3年前に解散していることになる。
- 5) 1791年にカトリックの解放と議会改革を目的としてウルフ・トーン (Theobald Wolfe Tone, 1763-98) らが結成した政治組織。
- 6) 演出ブラッドピア (Harry Bradbeer), キャストは以下の通り——Colum Convey (Larry), Stuart Graham (Kyle), Conor Grimes (Dougie), David Hayman (Alec), Sean Kearns (Norman), Frank MacCusker (Jack), Alan McKee (Mac), Laine McGaw (Sandra), Patrick O'Kane (Freddie), Lior Roddy (Heck)。すなわち, Larry, Kyle, Jack, Freddieの4人はダブリン舞台版の初演キャストと同一で, Normanはベルファースト初演時のキャスト。舞台には登場しないDougie, Mac, Heckもこのテレビ映画では登場するらしい。なお, KyleとSandra夫婦役を演じるGrahamとMcGawは実生活でも夫婦で, アントリム州在住だという。
- 7) この作品でわれわれ日本人に示唆的なのは, 署内での取調べにテープ録音を用いている点である。日本と英米の取り調べ方法の相違を論じた2つの新聞記事を引用しよう。——「英国の警察では, 容疑者の取り調べをテープに録音するのが原則だ。ビデオ撮影も活用している。... 日本では警察官や検察官が容疑者の言い分を聞いてから, それを整理して読み聞かせ, 調書にまとめる。しかし裁判が始まると被告が「強引な取り調べだった。調書は捜査官の作文」などと主張することがある。もし, 取り調べ状況を録音したり撮影したりする「取り調べの可視化」を行っていれば, 紛糾するケースは少なくなるだろう。... 英国では1984年の法律に基づいてテープ録音などの実務規範が定められている。警察官は2本のテープを録音機に入れ, スイッチを押す。名前, 階級を告げ, 立ち会いの警察官らに自己紹介をさせる。容疑者が氏名, 生年月日などを述べた後, 警察官は取り調べの目的, 現在の日時, 場所を告げる。... 取り調べの終了後, テープのうち1本は, 改ざんされないように封印, もう1本は証拠とするほか, 容疑者や弁護士がコピーできるようにする。... 英国は法廷証言を重視する陪審制の国であり, 調書に頼る日本とは事情が異なる。しかし日本でも取り調べの可視化は有力な改善方法だ。(共同)」(*The Japan Times*, 2003年6月6日, p.16.) 「近い将来, 裁判員制度が導入される。重大な刑事事件について, くじで選ばれた市民が裁判官と共に有罪・無罪を判断し, 量刑も決めるのだ。... 市民が参加する以上は, わかりやすさが求められる。録音や録画ほどわかりやすく, 客観的な証拠はない。... 日本の捜査当局は「ビデオを撮ったりすれば, 容疑者が真実を話さなくなる」と反対している。だが, 適正に自白を得ていることがだれにも明らかになれば, むしろ捜査当局の信頼は一層高まるはずだ。/取り調べ状況の録音・録画は国際的な流れとなっている。英国では80年代にテープ録音が法律で義務化された。米国でも録音・録画の動きが広がっている。... テープ録音を義務化した85年の米国アラスカ州最高裁の判決は言う。「録音は被告の権利だけを守るのではなく, 真実を発見することを助ける」(『朝日新聞』社説「録音で証拠を残せ」, 2003年7月28日, p.2.)
- 8) 分田順子「紛争の終結から分断の超克へ——北アイルランドにおける社会共有の模索」, 吉川 元, 加藤

普章(編)『マイノリティの国際政治学』(有信堂高文社, 2000年)所収, p.30.

- 9) 第2次大戦中にロンドンの首都警察所属のマリオン・マクミラン (Marion Macmillan) 巡査部長によって婦人警察部門が設立され, 1944年にはエニスキレンから6名の婦警班が誕生した。/1975年3月16日にはミルドレッド・ハリソン (Mildred Harrison) 予備巡査がバンガー (Bangor) を巡回中に, ロイヤリストによってパブの窓に仕掛けられたボール爆弾 (canister bomb) の爆発で, 紛争における最初のRUC犠牲者, しかも女性犠牲者となった。——Chris Ryder, *The RUC: A Force under Fire* (London: Mandarin, 1997), p.80, p.132.
- 10) 北アイルランド自治議会 (定数108) における主要4党の獲得議席は以下の通り。

支持勢力 路線	カトリック系		プロテスタント系	
	強硬派	穏健派	穏健派	強硬派
政党名	シン・フェイン党	社会民主労働党	アルスター統一党	民主統一党
略称	SF	SDLP	UUP	DUP
今回 (2003)	24	18	27	30
前回 (1998)	18	24	28	20

『朝日新聞』, 『日本経済新聞』, 『山陽新聞』, *The Japan Times* 各紙の2003年11月30日の記事 (順にp.5, p.5, p.10, p.1) を参考に作成。

参考文献

みなみの南野泰義「アルスター・ユニオニストの政治イデオロギーとアイデンティティ」, 中谷 猛, 川上 勉, 高橋 秀寿 (編)『ナショナル・アイデンティティ論の現在——現代世界を読み解くために』(晃洋書房, 2003年)所収, pp.203-228.

テキスト

原作からの引用は以下のテキストより行い, 拙訳末尾に頁数を付した。

- Gary Mitchell, *Tearing the Loom and In a Little World of Our Own* (London: Nick Hern Books, 1998)
 —————, *As the Beast Sleeps* (London: Nick Hern Books, 2001)
 —————, *Trust* (London: Nick Hern Books, 1999)
 —————, *A Force of Change* (London: Nick Hern Books, 2000)